

The Ploughman's Lunch にみる 政治と個人のモラル

武藤哲郎

1. はじめに

イアン・マキューアン (Ian McEwan) の作品に見え隠れするテーマ、あるいは彼の作品を括ることが出来る一つの言葉があるとすれば、それは「モラル」と思われる。この場合モラルとは、マキューアンが自ら定義する「他人の身になって考えること」、つまり道徳である。初期の短編小説 *First Love, Last Rites* (1975)、*In Between the Sheets* (1978) では、精神的に病んだ現代社会を映し出して不思議なくらい登場人物にモラルがない。*The Cement Garden* (1978) では死んだ母親を地下室にセメント漬けする子供たちが描かれ、1983年にイギリスで放映された *The Ploughman's Lunch* では、全ての人間がモラルを口にしながら私利私欲で動いている。どこを見回してもモラルが存在しない八方塞の現代社会をマキューアンは作家生活の前半を費やして描き続けてきた。*The Child in Time* (1987) では子供を誘拐された童話作家が結婚生活に破綻をきたしている。しかし、90年代の後半からマキューアンはその八方塞の状態から抜け出して、まるで暗闇に一条の光を投げかけるように、現代社会ではモラルが必要なのだと自分の意見を少しずつ明らかにするようになった。ブッカー賞はこの作品で取るはずだったと囁かれる *Enduring Love* (1997) では、子供を助けようと最後まで気球にしがみついて命を落とした男性がわき筋として描かれている。ブッカー賞を受賞した *Amsterdam* (1998) は互いにモラルの無さを責め合い毒を盛りあって死んでいく二人の主人公を逆にコミカルに描いていて、今までの暗さが無い。最高傑作と評判の高い *Atonement* (2001) では過去に二人の恋人たちの人生を狂わせてしまった罪を、「書くこと」によって償おうとする女性が小説家としてのモラルを論じている。

マキューアンは1980年代からテレビあるいは映画のシナリオを手がけるようになった。*Jack Flea's Birthday Celebration* (1976) はTVドラマのシナリオで子供を大人にさせない異常な母親が描かれ、その原型は *First Love, Last Rites* の 'Conversation with a Cupboard Man' に見られる。*Solid Geometry* (1979) も同名の短編が *First Love, Last Rites* にあるが、直前になってグロテスクさが理由で放映禁止になった。*The Imitation Game* (1980) は彼が本格的にTVドラマ用に書いた脚本で、第二次大戦当時の暗号解読にまつわるイギリスの秘密計画を取り扱っている。*The Ploughman's Lunch* (1983) は1981年から映画監督リチャード・アイアー (Richard Eyre) と構想を練っていたもので、1983年にイギリスで、1984年にアメリカで放映されている。

マキューアンはこのように1980年代から小説とは違うジャンル、テレビ・映画のシナリオを書き始めた理由を「小説を書く孤独から逃げたかった」と語っている。毎日何時間も一人で机に座って、実在しない人物たちをあれこれ弄り回すというのはなるほど気遣いじみた行為かもしれない。

マキューアンが外の世界に出て、生の人間と協力し、生の世界に触れたかったのも、小説家としての視野を広げるためのごく自然な欲求であった。テーマも初期の短編小説に見られた「逸脱した性」から離れて、1980年代からは歴史そして政治を積極的に扱うようになった。たとえば、*The Ploughman's Lunch* 以降に出版された小説、*The Child in Time* (1987) はサッチャー政権の教育政策が色濃くその背景にあるし、*Black Dogs* (1992) もドイツ軍が残した軍犬を扱っている。1980年代と言えば、アメリカとソ連を中心にした冷戦の時代で、外の世界に目を向け始めたマキューアンの目の前には、「鉄の女」と知られるサッチャー首相そしてフォークランド紛争があった。

映画 *The Ploughman's Lunch* は、1956年に起きたスエズ動乱 (The Suez Crisis) の歴史的再評価が一つのテーマになっている。スエズ動乱はマキューアン自身が長年暖めてきたテーマでもある。彼の父親は根っからの軍人で、子供時代に嫌と言うほどその厳格な社会をマキューアンは肌で感じていた。スエズ動乱時も父親はリビアに駐屯し、当時8歳だったマキューアンも一緒に生活していた。彼は幼いながらも「世界政治の動きを初めて肌で感じ取った」と言っている。彼はスエズ動乱に関する間違った歴史的再評価、つまり歴史の捏造を現代のロンドン、つまりサッチャー政権下で起きたフォークランド紛争を背景に描いている。個人的モラルがないラジオ記者が、政治的モラルの無さで引き起こされたスエズ動乱に誤った歴史的再評価を下そうとするのがこの映画の主題になっている。

2. スエズ動乱 (1956年)

スエズ運河は1869年に開通し、地中海と紅海を結ぶその全長は171 kmにも及ぶ。1875年スエズ運河会社の株の大部分を買い占めたイギリスは、1882年スエズ運河を守る目的でエジプトを占領し、第二次大戦中は3万6千人の部隊を駐屯させて運河とアラブの油田を守った。1952年エジプトにクーデターが起こる。王のファルーク1世が退位させられ、革命を指揮したナギブ将軍がエジプト共和国の初代大統領となり、ナセル大佐 (Gamal Abdel Nasser) は国務大臣となった。1954年ナセルはナギブに代わって首相となり、1956年エジプト共和国の大統領となる。ナセルはパレスチナ人をユダヤ人から解放することを宣言し、ソ連とチヨコスロバキアから戦闘機、爆撃機そして戦車を買いはじめた。彼はまた国の産業化を図るために、土地を再配分し、アスワン・ダムの建設に乗り出す。アラブ人の独立を目指す彼は、イギリス政府に1956年に同軍のスエズ駐留期限が切れることを通告した。

アメリカのアイゼンハワー大統領はエジプトとソ連の緊密な関係に憂慮して、1956年7月アスワン・ダム建設のための5千6百万ドルの資金援助を取り消してしまった。ナセルは怒り、7月26日スエズ運河の国有化を宣言する。アスワン・ダム建設の費用を運河の通行料から捻出しようとしたのである。しかし、スエズ運河会社の株の大部分を占めるイギリスとフランス人は手をこまねいて見ているわけにはいかなかった。これが、「スエズ動乱」の始まりである。しかし、イギリスとフランスは大っぴらにエジプトに攻め入るわけにはいかなかった。侵略戦争となり、世界各国からの非難は必至であった。「敵の敵は我が味方」の原則で、イギリスとフランスはエジプトの敵イスラエルを味方に引き入れるという前代未聞の作戦を立てる。イギリスのイーデン首相 (Anthony Eden) は、10月21日フランスとイスラエルの首相に密かにフランスのセーヴルで会い、作戦の実行を約束し合う。

1956年10月29日イスラエル軍がエジプトに侵攻する。2日後イギリス軍とフランス軍は、イスラエル軍とエジプト軍の戦闘を止めさせる口実でエジプトの空軍基地を爆撃し、11月5日スエズ

運河の北にあるポート・サイドに空挺部隊を降下させた。侵略戦争ではなく、イスラエルとエジプトの紛争を解決するための軍隊派遣が名目であった。この時までにはイスラエル軍はシナイ半島を占領していた。すべて筋書き通りに運んだ。ところが、味方してくれるだろうと思っていたアメリカのアイゼンハワー大統領は10月30日エジプト侵攻に抗議してイスラエルへの援助を見合わせ、翌日国務長官がスエズ運河への武力行使に対してイギリスとフランスを正式に非難する行動に出た。11月1日イギリスの下院で保守党のウィリアム・イエイツは「女王陛下の政府が国際的な陰謀に加担している」と政府の謀略を示唆する発言をした。その日の遅く、アメリカとソ連の代表が国連の安保理で停戦決議案を提出し、イギリスとフランスはこれに拒否権を發動したが、総会において64対5で決議が採択された。国際世論の反発に直面したイギリス、フランス、イスラエルは軍隊の撤退を余儀なくされ、国連軍がエジプトの前線を管理下に置くことになり、ナセル大統領はスエズ運河を閉鎖し、アラブ諸国に西ヨーロッパへの石油の輸出を減らすことを呼びかけた。その結果、石油の供給制限が数カ国で導入され、エジプト侵攻の2ヵ月後、イギリスのイーデン首相は退陣し、フランスのモレ首相とその政府は1957年5月に崩壊した。これが、「スエズ動乱」の結末である⁽¹⁾。

スエズ動乱は歴史的に見て、イギリスがもはや中東地域では支配力を失ったことを世界に印象付ける事件であった。イスラエルと最初から謀議をしながら、それを隠し否定していたことがその後イギリス政府と国民を「暗い長い反省の時間」に追いやり、イギリス史の汚点となったのである。1956年10月25日、イギリスの閣議内容は以下のようになっている。

The Cabinet must therefore consider the situation which was likely to arise if hostilities broke out between Israel and Egypt and must judge whether it would necessitate Anglo-French intervention in this area. The French government were strongly of the view that intervention would be justified in order to limit the hostilities and that for this purpose it would be right to launch the military operation against Egypt which had already been mounted. Indeed, it was possible that if we decline to join them they would take military action alone or in conjunction with Israel. In these circumstances the Prime minister suggested that, if Israel launched a full-scale military operation against Egypt, the Governments of the United Kingdom and France should at once call on both parties to stop hostilities and to withdraw their forces to a distance of ten miles from the Canal; and that it should at the same time be made clear that, if one or both Governments failed to undertake within twelve hours to comply with these requirements, British and French forces would intervene in order to enforce compliance.⁽²⁾ 「下線筆者」

イーデン首相は「イスラエルとエジプトとの間に紛争が起こった場合」と仮定で物を言っているが、すでに彼はイスラエルがエジプトを侵攻する約束を取り付けていたのである。同様に、「イギリスとフランス政府は直ちに両国に戦闘停止と運河から10マイルの位置まで撤退することを要求する」と述べているが、彼らの意図は紛争の解決ではなくスエズ運河の確保であることは、よく考えてみれば誰もが推測できることである。この作戦を知っていたのはイーデン首相を取り巻くごく少数の閣僚であり、イギリス国民も、そしてアメリカ政府にも知らされていなかった。イーデン首相はスエズ動乱が収まった、12月の下院の演説でも「イスラエルがエジプトを攻撃することは前もって知らなかった」とイスラエルとの協力を否定している⁽³⁾。スエズ動乱が長い間イギリス国民の心の中で暗い汚点となったのは、作戦が失敗したというよりは、名誉を何よりも尊ぶ国民の政治

家がモラルを欠いた挙に出たことが内外に知れ渡ったからであろう。

3. *The Ploughman's Lunch*

マキューアンはこの映画のシナリオを完成させるのに一年の調査を行った。監督リチャード・アイアーとも何度か相談して映画のテーマを模索した。彼らは現代のロンドンを描きながらも、「歴史の意味を知らないで生活することの個人と国家への危機」をテーマに据えようと意見が一致した。マキューアンはある時、'ploughman's lunch' がイギリスの伝統的な料理ではなく、60年代にイギリスのパブが客に食べさせようと考案した料理であることを知った。彼は「自己の利益になるような過去の捏造」という意味のメタファーで、これを映画のタイトルとしたのである⁽⁴⁾。

1956年のスエズ動乱はある世代にとって、イギリスがもはや世界の強国ではないことを如実に示す事件だった。当時の政府は道義に則って行動しているかのように見せかけ、実はごまかしの手段を講じていた。アメリカ合衆国の従僕であることも内外に示され、イギリスは長い間暗い反省の時間を持たなければいけなかった。父親と共に当時リビヤにいたマキューアンは、機関銃座のそばのテントで他の子供たちと数週間一緒に生活した。「急に毎日の生活が過去に遠のき、生まれて初めて政治上の出来事が現実であり、人々の生活に影響を及ぼすことを理解した」と彼は語っている⁽⁵⁾。マキューアンは以下のように、この映画のテーマを説明している。

In 1881, with the liberal consensus and political idealism generally in retreat, it seemed plausible to imagine how an ambitious writer might set out to rewrite the Crisis in terms of the steely pragmatism being promoted now by the government of Mrs Thatcher. The past would be reinterpreted while the amateur historian unconsciously acted out in his private life a sequence of betrayals and deceits which would parallel the events he was distorting in his history.⁽⁶⁾

「鉄のような実用主義によってスエズ動乱が、野心的な作家によって書き換えられる」とあるが、「鉄のような」とは勿論引用にあるようにサッチャー首相を意味する。つまり、この映画のテーマは引用の後半にあるように「素人の歴史家が無意識のうちに裏切りとごまかしで自分の生活を捻じ曲げるように、歴史上の出来事を捻じ曲げ、過去を再解釈してしまう」である。

この映画の主人公は、BBCのRadio 4の記者ジェイムズ・ペンフィールド（James Penfield）である。友人のジェレミー・ハンコック（Jeremy Hancock）も記者であり、彼らの仲は友人以上の含みが持たされている。ジェレミーの友人スーザン・バリングトン（Susan Barrington）を、ジェイムズが好いて追いかけることになる。彼ら3人は、映画の最初で出版社のパーティーで顔を合わせる。ジェイムズは数日後、出版社の社長ゴールド（Gold）にピカデリー・サーカスのレストランで会う。彼は、フォークランド紛争が起こりつつある今、1956年のスエズ動乱を見直すべきだと熱っぽくゴールドに語る。ジェイムズはアメリカの大学で使用される教科書をゴールドの出版社から出そうとしていたのである。彼はその内容について以下のように語る。

...there's the business of the British collusion with Israel. Of course it's proved beyond all doubt now, but I'd want to set it in the context of diplomacy and warfare. I mean, if you're about to attack one country, it makes sense to encourage neighbouring countries

to attack it too. The French understood this. ...My enemy's enemy is my friend. It's simple as that. If we had not been scrupulous, we would not have been so ashamed Now it's as if we've discovered ourselves again. We're acting independently when the standard line has always been that after Suez we couldn't lift a finger without the Americans...⁽⁷⁾

ジェイムズが書こうとしている歴史の再評価は、「ある国を攻撃しようとするとき、隣接した国を誘って攻撃を仕掛けるのは意味がある」ということ、つまりイギリスがイスラエルを誘ったのは当然であるということで、今までのスエズ動乱の解釈を覆すものである。彼によれば、何もスエズ動乱に関してイギリス国民があのように恥ずべきではなかったというのである。では、何故ジェイムズはこのような大胆な再評価を下そうとするのか。それは引用の後半にあるように、フォークランド紛争の成り行きを彼が敏感に感じ取ったからである。

イギリスの正当性をアメリカ大統領に説き、即座に海軍をフォークランドに派遣したサッチャー首相はスエズ動乱で示された「弱いイギリス」のイメージを払拭するものだった。ジェイムズはこういった政権の動き、世論の動きに合致する「売れる本」を書こうとしているのである。ゴールドとの会話を読んでも、どことなくジェイムズは誠実さに欠けている。レストランでの食事が終わり、散歩をしている途中、ゴールドは読者がアメリカの大学生であると念を押す。それにジェイムズは次のように答える。

Like I was saying, the American angle in Suez is very important. I wouldn't want to say they let us down. I think that's wrong. A good ally is one who doesn't back you up in your mistake, who tells you when to pull back. And the Americans were good allies. Simple as that.⁽⁸⁾

スエズ動乱でアメリカが取った行動は、確かにイギリス政府にとっては落胆すべき以外の何ものでもなかった。イギリスという強国の威信が失墜したのである。味方についてくれるはずと思っていたアメリカが、いわば敵にまわったことになる。それを、「良い友人というのは、間違いを犯すのを手助けする人ではなく、いつ手を引くかを教えてくれる人である」と歯が浮くような世辞を書こうとしている。いかにもアメリカの大学生を意識していることが伝わってくる。

マキューアンは監督のアイアーの提案に従って、主人公ジェイムズの人格的背景がより鮮明になるように工夫している。たとえば、サッチャー政権（保守党）の政策に合致するような本を書こうとしているのに、アンから「あなたは保守黨員なの？」と聞かれて、そうであると答えているところである。ジャック・スレイ（Jack Slay, Jr.）は彼の本の中で、ジェイムズを「日和見主義的カメレオン（an opportunistic chameleon）」と称し、「彼は状況に応じて、労働黨員になったり保守黨員になったりする」と述べている⁽⁹⁾。彼は「二枚舌（duplicity）が二つのレベルで存在することを指摘している。それはジェイムズの個人のレベル、そしてスエズ動乱での政治のレベルにおいてである。さらに、スーザンが自分に気があると思い込んでいるジェイムズと、歴史の誤った解釈をすすんで受け入れようとするイギリス国民が自己欺瞞（self-deluded）という点で似ていることを指摘している。

ジェイムズはある大学に出かけて、そこの講師からスエズ動乱についての情報を得る。テープに録音したその講師の声がしばらく、この映画の場面の背景で聞こえてくる。

You see, if we talk of a nation, like an individual, acting emotionally, we can also speak of it acting deceitfully. Britain and France had entered into a secret agreement with the Arabs' deadly enemy, the Israelis. The agreement was signed or initialed by the Foreign Secretary, Selwyn Lloyd on or about 23 October, at Sevres. The Israelis were to attack Egypt on an agreed date. British planes based in Cyprus were to precision bomb Egyptian airfields to protect Israeli cities from retaliation. After putting out an ultimatum to both sides to withdraw to ten miles from the Canal, which of course the Egyptians would have to ignore since the Canal is a hundred miles inside their territory, the British and the French would invade on the pretext of 'separating the combatants'. That became something of a catch phrase — 'separating the combatants'.⁽¹⁰⁾

この歴史学の講師に「国家が個人のように感情的に行動すると言うことができるなら、国家が詐欺的に行動すると言えるはずである」とマキューアンは言わせているが、まさにマキューアンは個人と同じように国家にもモラルがあるべきであると考えている。「戦闘集団の仲裁に入る」という口実でイギリスとフランスの軍隊はエジプトに侵攻したが、その戦闘は実はイギリスが最初に始めたものである。まさに詐欺的な行動である。さらに、この講師はナセル大統領が1956年の夏と秋にはスエズ運河の交通を円滑に行っていたので、イギリスがエジプトを攻撃する経済的な理由はもはや無かったと付け加えている。残っている理由は、ナセルを思い知らせることと、イギリスが独自の力でアラブ諸国に対峙できることを世界に示すことだけであった。

ジェイムズは、ジェレミーからスーザンの母親のアン・バリントン（Ann Barrington）が筋金入りの労働党員の歴史家で10周年を記念して1966年にスエズ動乱に関してすばらしい記事を書いたと知らされる。彼女の最初の夫はBBCの編集者でスエズ動乱の際、BBCが独立した報道が出来るように尽力していた。彼女は夫からいろいろスエズ動乱に関しての情報を集めていたが、彼が亡くなってからそれを本にすることをあきらめていた。ジェイムズはスーザンを通して彼女に面会を求めノーフォークの邸宅に向かう。彼女の口から聞かされるスエズ動乱に関する彼女の評価ははっきりと読者に伝わってこないが、勿論それはジェイムズがインタビューした大学の講師と同じである。ジェイムズは彼女から「あなたは労働党員なの？」と聞かれたとき、そうであると嘘をつく。そうであったほうが彼女から情報を仕入れやすいからである。彼女の家から帰る途中彼の車はパンクする。道端に止めた車のカセット・プレイヤーから、あの大学講師の録音された声が聞こえてくる。

There was a real desire on the British part to appear virtuous while behaving aggressively, and the pursuit of virtue led to many lies being told, most notable the Prime Minister's in the House of Commons on 20 December when he said that there was 'no foreknowledge that Israel would attack Egypt'. Perhaps we should reverse the question and ask ourselves to what extent individuals behave like governments, who are bound to act in the national interest which in turn is rarely separable from the government's interest, or that of the class it represents...⁽¹¹⁾

当時のイギリス政府は道義に基づいて行動しているかのように見せかけなければならなかった。そのためはいくつかの嘘をつかなければならなかった。その際たるものが、この論文の最初に取り上げたイーデン首相の下院での「イスラエルがエジプトを攻撃することは前もって知らなかった」

という演説である。ジェームズはこのとき「怒りに任せてカセットのスイッチを切る」という行動を起こすが、それはこの大学講師の立場が彼と正反対であることを示すばかりでなく、「モラル」という基準で判断しているところに彼が憤りを感じているのを読者に示すためのものでもある。数週間後ジェームズが再びアンの邸宅を訪れたとき、実家から母親危篤の電話を受けるが、彼はアンには親戚の体調がおかしいとだけ言ってスエズ動乱の情報を聞き続ける。彼にとって危篤の母親よりもこれから書こうとする本のほうが大事なのである。彼はアンからギリシャで戦死した弟の写真を見せられる。弟はペンフィールドに瓜二つであった。アンはその夜ジェームズの寝室に入ってくるが、彼は彼女の唐突な行動を拒否しようとしなかった。スエズ動乱の本のためである。ロンドンに帰った彼はアンの現在の夫マシュー（Matthew）の招待でコマーシャルの撮影をしている現場を訪れる。マシューはジェームズが食べている‘ploughman’s lunch’はイギリスの伝統的な食べ物ではなくて実はパパが60年代に宣伝ででっち上げた料理であることを教える。この場面はジェームズが過去を今まさに「捏造」しようとしていることを示す効果的なメタファーである。マシューは本題に入って、ジェームズがノーフォークを訪れた理由がスエズ動乱ではなくてアン自身に興味があったのではないかと言う。マシューにはアン以外に恋人がいるので、遠慮なくアンと付き合っただけでよいと許可を与えるのだった。ジェームズのラジオ局にはアンから頻りに電話がかかってくるようになり、もう利用価値の無くなったアンに対して彼は詩人のエドワードを介してしばらくロンドンを留守にするので、手紙を書くから電話をかけないでほしいと伝える。

この映画の最後でジェームズ、ジェレミーそしてスーザンがブライトンで行われる保守党の大会に出かける。そこでサッチャー首相がフォークランド紛争に言及して演説を行う。スエズ動乱とは違って、イギリスが断固とした態度ですばやく対応したのでイギリスの威信は上がっていた。サッチャー首相の演説を耳にしながら、ジェームズはスーザンの恋人は実はジェレミーであったことに気付く。聞こえてくるサッチャー首相の演説は次の通りである。

...it [doubt about the determination of the British people] was removed by men and women who a few months ago brought a renewed sense of pride and self-respect to our country. They were for the most part young. Let all of us here, and in the wider audience outside, pause and reflect on what we who stayed at home owe to those who sailed and fought and lived and died and won. If this is tomorrow's generation, then Britain has little to fear in the years to come! We will tell the people the truth, and the people will be our judge!⁽¹²⁾

サッチャー首相の演説は、イギリスのとった行動がいかに正しいかを力強く国民に納得させるものである。ジェームズは、このような強いイギリスの政策に合致するような歴史的再評価、つまりスエズ動乱でイギリスがとった行動は何も恥ずべきものではないという主旨の本を出版する。その本は出版会社社長ゴールドからも、内外からも賞賛を受ける。母親の葬儀で、時計を見やるジェームズの不快なイメージを、デイビッド・マルカム（David Malcolm）は彼の本の中で「イギリスの政治とモラルを厳しく、端的にあらわしている」と述べている⁽¹³⁾。

4. 個人のモラルと政治のモラル

ジェームズがこの映画の半ばごろでポリテクニクの大学講師に会いに教室に入っていったとき、

講師は講義をしていた。その歴史の講義をジェイムズは教室の後ろでしばらく聞いていたわけだが、講師はこういった言葉で授業を締めくくる。

Next week I shall be considering the extent to which the behaviour of nation states or governments may be judged by the moral criteria we normally apply to individuals. Thank you.⁽¹⁴⁾

何気なく置かれてあるセリフだが、この映画においてマキューアンの立場を示す重要な言葉である。「個人のモラルをどの程度まで政治に適用できるか」という問題である。それ以前に「政治にモラルはあるのか?」という基本的な問いかけがある。モラルを気にしていたら自国の利益は計れないという考え方が一方にある。他国を騙してまでも、自国の利益を引き出すのが政治、もっと極端に言えば、他国を騙していると悟られずに自国の利益を生み出すのが最高の政治という考え方がある。しかし、マキューアンの考えは、個人にモラルがあるように政治にもモラルがあって然るべきというものである。*The Ploughman's Lunch* では、二層のモラルを扱っている。個人のモラルと政治のモラルである。個人のモラルとは、ラジオ記者ジェイムズがスエズ動乱の本を書くために自らが取った手段である。政治のモラルとは、1956年のスエズ動乱で当時のイギリス政府が取った対応である。個人のモラルの無さが、歴史を捏造し政治のモラルの無さを隠してしまい、結果的にはそれが個人と国家を危機に追いやってしまうというのがマキューアンの主張である。このような八方塞の状態に上述したサッチャー首相の演説が聞こえてくるのは、確かに意味があると思われる。

サッチャー首相は1995年にスエズ動乱を振り返って次のように述べている。

The balance of interest and principle in the Suez affair is not simple one. I had no qualms about Britain's right to respond to Nasser's illegal seizure of an international waterway — if only action had been taken quickly and decisively. Over the summer, however, we were outmanoeuvred by a clever dictator into a position where our interests could only be protected by bending our legal principles. Among the many reasons for criticizing the Anglo-French-Israel collusion is that it was bound to tarnish our case when it became known, as it assuredly would and did. At the same time, Suez was the last occasion when the European powers might have withstood and brought down a Third World dictator who had shown no interest in international agreements, except where he could profit from them. Nasser's victory at Suez had among its fruits the overthrow of the pro-Western regime in Iraq, the Egyptian occupation of the Yemen, and the encirclement of Israel which led to the Six Day War — and the bills were still coming in when I left office.

As I came to know more about it, I drew four lessons from this sad episode. First, we should not — get into a military operation unless we were determined and able to finish it. Second, we should never again find ourselves on the opposite side to the United States in a major international crisis affecting Britain's interests. Third, we should ensure that our actions were in accord with international law. And finally, he who hesitates is lost.⁽¹⁵⁾

「スエズ動乱における利益と道義のバランスはむずかしい」と前置きしながらも、「ナセルの違法な運河獲得に反応したイギリスの行動については何の良心の呵責も感じない」と言っている。ただし、「行動がすばやく断固として行われていれば」と付け加えている。つまり、これは「勝てば官軍」の論理で、結果が手段を正当化することを裏付けている。マキューアンの言う‘the steely pragmatism’である。サッチャー首相がスエズ動乱で学んだ教訓の最後は「ためらう者は負ける」である。彼女は1982年のフォークランド戦争をわずか3ヶ月で解決してしまった。アルゼンチン軍がフォークランドに侵攻したとき、レーガン大統領はアルゼンチン寄りでミッテラン大統領は非協力的であった。彼女は英・米・仏のトップ会談で英国の正当性を認めさせ、国連安保理も味方につけてしまうという離れ業をやった。国内では軍事行動に反対した外相を直ちに更送し、議会やテレビ演説を通して国民に断固とした態度を取るべきことを呼びかけた。まさに「鉄の女」にふさわしい行動である。

5. おわりに

マキューアンがサッチャー首相の政策や人となりをどう見ていたかは、興味深いテーマである。C. バーンズ (C. Byrnes) は「私の父は陸軍に49年間いて私は陸軍のキャンプで育った……私は十分すぎるくらいに陸軍を味わった」とマキューアンの言葉を引用し、「彼の若い頃の左翼的思想は、この厳格な嚴重に組織化された世界の反発として形作られた」と述べている⁽¹⁶⁾。さらに彼女はマキューアンの母親の敏感な階級意識に言及し、陸軍のビーチで階級によって子供たちの遊ぶ場所が異なっていたことが彼を不幸にさせたと述べている。いずれにしても上述の問題は、とても一つの章で論じ切られるテーマではない。ただ、*The Ploughman's Lunch* のあと、1987年に出版された *The Child in Time* にヒントが多くあることだけを指摘しておくことに留める。

〈注〉

- (1) ‘Suez Crisis’, Education on the Internet & Teaching History Online: www.spartacus.schoolnet.co.uk を参考にした。
- (2) *The Suez Crisis*, p. 102.
- (3) *Ibd.*, p. 146.
- (4) *The Ploughman's Lunch*, p. 26.
- (5) *Ibd.*, p. 27.
- (6) *Ibd.*, p. 28.
- (7) *Ibd.*, p. 46.
- (8) *Ibd.*, p. 47.
- (9) *Ian McEwan*, p. 107.
- (10) *The Ploughman's Lunch*, pp. 70-71.
- (11) *Ibd.*, p. 80.
- (12) *Ibd.*, pp. 115-116.
- (13) *Understanding Ian McEwan*, p. 186.
- (14) *The Ploughman's Lunch*, p. 61.
- (15) ‘Suez Crisis’, Education on the Internet & Teaching History Online.
- (16) *The Work of Ian McEwan*, p. 169.

参考文献

- Byrnes, C. *The Work of Ian McEwan: A Psychodynamic Approach*, Pauper's Press, 2002.
- Gorst, Anthony. *The Suez Crisis*, Routledge, 1997.
- Malcolm, David. *Understanding Ian McEwan*, University of South Carolina Press, 2002.
- McEwan, Ian. *A Move to Abroad: or Shall We Die? and The Ploughman's Lunch*, Picador, 1983.
- Slay, Jack, Jr. *Ian McEwan (Twayne's English Authors Series)*, Twayne Publishers, 1996.